

現代社会と若者たちを活性化する15のキーワード

# 開かれた大学院

# 12

産業集積地の構造転換と高度化の起爆剤となるのは、大学と空港……。専修大学社会知性開発研究センターによる「イノベーション・クラスター形成に向けた川崎都市政策への提言」と題された論文集から得られる「ヒント」のごく一部である。これまで大学院は隔絶された存在だったが、近年になって社会に大きく開かれており、このような実践的な研究も産学協同で進められている。今回は「開かれた大学院」をテーマとして、専修大学大学院の取り組みをまとめてみた。

## 研究、教育者の養成に加えて 高度職業人と生涯教育拠点に

2006年度に大学院に入学した社会人は、修士課程で約1万2000人。ドクターコース(博士課程後期)も含めれば約1万7000人に達する。大学院在籍者で見れば、約19%。大学院で学ぶ10人のうち2人は社会人という計算になる。

このように社会人の大学院生が増加したのは、90年代半ばから急速に普及した「社会人特別選抜」が直接的な理由とされている。基本的に筆記試験がないので受験負担は軽く、それによって大学院の門戸が大きく開かれたのである。同時に、昼夜開講など働きながら学べる制度も整備されたのだが、社会人学生の増加によって大学院も変貌することになった。

それを象徴するのが、03年から登場した「高度専門職業人」の養成を目的とする専門職大学院である。もともと大学院は研究者、教育者の養成を主眼としてきたのだが、それにビジネス、法科、会計など実務性の高い専門教育が加わったのだ。つまり、大学院

の門戸だけでなく、研究する目的・内容も、社会に向けて開かれたといえるだろう。

また、生涯教育も重要な役割であり、07年度からは団塊の世代が定年を迎えるため、それまではできなかった文化・歴史などを学ぶことを目的として入学するシニア大学院生も増加すると見られている。

専修大学大学院でも、このような大学院への期待に対応して、各研究科では豊富な教授陣のほかに、各界で現役活躍中の専門家を客員教授として招き、カリキュラムの充実と適切な指導で、時代の要請に応えたさまざまな新たな取り組みを進めている。その現状を法科大学院から紹介しよう。

## 理論と実務とを両立させた 「議論による問題解決能力」を育成

### ●専修大学法科大学院

法曹界への入口となる法科大学院が発足して3年目。今年は初の新司法試験が実施されたが、これは2年制の法律既修者コース修了者だけが受験した試験なので、3年制



法科大学院長  
平井 宜雄

の未修者コース修了者が受験する来年の試験こそが本番となる。

とはいえ、法科大学院は司法試験の予備校ではない。むしろ、そうした試験のための教育が不適切だという反省に立つて法科大学院制度が生まれたのである。いわば生まれた時から二律背反の課題に直面しているのだが、専修大学の平井宜雄法科大学院長はこうに語る。

「もともと専修大学は、市民生活の中で法律知識を活用できる人材育成を基本としてきました。したがって、本法科大学院においても司法試験のテクニックのみを重視した教育はできません。しかし、新司法試験がスタートすれば否応なく合格率で比較されることとなります。これはどの法科大学院にと

ても悩みの深い課題なのですが、私はそれでも法律家養成のための理論的教育と試験をも含めた実務的教育は決して矛盾しないと考えます。訴状ひとつ取っても、その背後には一定の理論があつて初めて成り立っているのです。それを的確に学生に把握させれば、理論と実務は一致します。それを可能にするのが、専修大学法科大学院の教育目的である。議論による問題解決能力の修得です。徹底した少人数教育で、双方向のみならず多方向による授業を展開しています」

東京都千代田区神田という都心立地に於いて、勉強環境・施設ともに充実しており、一人ひとり専用の大型キヤレルも自習室に備えられている。法曹界を目指す社会人学生も多い。

## 文部科学省が選定した オープン・リサーチ・センター

大学院の入学門戸や学ぶ内容は社会に大きく開かれたものとなったが、それをさらに一歩進めて、研究活動そのものも社会に開放しているのが、専修大学社会知性開発研

究センターに設置された四つの研究プロジェクトである。

この社会知性開発研究センターは、専修大学の理念である「社会知性」を専門的、学際的に研究・教育していく拠点だが、その活動の一環としてオープン・リサーチ・センター整備事業がある。これは文部科学省が選定する私立大学学術研究高度化推進事業の一つであり、学部における現代G.P.のような競争的な重点支援制度。5年間にわたって研究費が助成されるが、「学外の幅広い人材を受け入れたり、研究成果を広く公開するなど、オープンな体制の下で行われるプロジェクト」が対象となる。

専修大学では四つのプロジェクトが文科省に選ばれているのだが、ドクターコースの学生や博士号取得者などを「任期制助手」として採用。本格的な研究者への道も開いている。以下、四つのプロジェクトの概要を研究代表の教授に聞いた。

## 川崎市も全面協力する 政策研究

●イノベーション・クラスター形成に向けた川崎都市政策への提言



都市政策研究センター  
経済学部教授  
平尾 光司

「アメリカの主要都市と比べて、川崎市の競争力はどれくらいだと思いますか。専修大学望月宏経済学部教授のまとめによれば29位。都市インフラが脆弱ということですね。こうした各種の調査・研究によって、産

業集積地である川崎市を高度化する構造転換、つまりイノベーションを提案することがテーマ。専修大学も川崎市に立地し、従来からK.S.パートナーシップとして多面的に連携してきたことから、このプロジェクトには全面的な協力を得ています。都市産業、都市経済政策、都市基盤、都市比較の四つのエッセンスに分けてプロジェクトを進行。それぞれ興味深い成果を挙げており、市民向けのシンポジウム、公開講座や経営者を集めた研究会などで発表しています。世界トップを目指す産業の高度化には、優れた頭脳の集積とネットワークが不可欠。そのためには大学と空港、そして誰もが住みたくなくなるような環境が必要なのです」

## 独立型の中小企業が 経済発展のカギ

●アジア諸国の産業発展と中小企業



中小企業研究センター  
商学部教授  
小口 登良

「どんな国でも中小企業は多く、その新陳代謝が新しい雇用を生み出し、経済発展の原動力となるのですが、国によって中小企業のスタイルは異なります。日本では優れた技術により大企業を支えているのに対し中国では低賃金と旺盛な販売意欲を武器にしています。台湾の場合は独立志向が強く、輸出市場にも進出しています。こうしたアジア諸国の中小企業の実態を調査し、その活動が経済発展にどのような影響を与えているかを研究することがテーマです。各国

の中小企業を実態、金融、計量、生産性、環境の観点から分析し、その役割や発展性や問題を解明。アジア中小企業論を構築し、将来的にはアジア中小企業白書を刊行したい。こうした中小企業の振興のためには産業集積と情報のネットワーク、金融面などの支援が不可欠。つまり政策であり、その具体例は川崎市にあり、つながついていくわけです」

## 「写本」研究とメディア情報学 の「コッポレーション」

●Anglo-Saxon語の継承と変容



言語・文化研究センター  
文学部教授  
松下 知紀

「アングロ人とサクソン人が英語の起源であり、低地ドイツからデンマークなどを経て、今のブリテン島に住み着いて発展させてきました。ラテン語やフランス語の影響も随所にあります。その変容を数々の「写本」と比較して検証していくことがテーマ。「写本」は印刷物と違って手書きですから、それぞれ1冊しかありません。専修大学でも20冊所蔵しており、それでも他大学より多いのですが、そのほかの「写本」を見るためにはオックスフォードなど海外の図書館まで足を運ぶ必要があります。いわば研究には空間的な制約が伴うわけです。このプロジェクトでは「写本」をデジタル化してデータベースにすることで、この制約を解消。さらに、デジタル化が可能にする新たな研究方法で言語の変容と継承を追いかけます。これまでになかった「写本」とメディア情報学のコッポレーションであり、シンボ

ジウムや研究会も頻繁に開催しています」

## 明治維新、戦後の民主化にも 大きな影響

●フランス革命と  
日本・アジアの近代化



歴史学研究センター  
文学部教授  
青木 美智男

「専修大学では1977年にフランス革命に関連する4万数千冊におよぶベルンシュタイン文庫を約3億円で購入しました。これはフランス国立図書館に次ぐ規模で、世界的に有名な研究者が閲覧に来るほど質も高いのですが、手つかずというものが少なくありません。そこで、正確な内容把握と目録などを整備することが研究の中心。フランス革命はまた、明治維新など、アジアの近代化にも大きな影響を与えており、福澤諭吉もその思想に影響を受けました。こうした調査や研究成果を公開講座や国際シンポジウムを通して随時発表していますが、戦後の民主化や漫画「ルサイユのバラ」が大ヒットしたこともあつて、参加者の関心も高く、毎回質問も活発です。本年度は集大成として「フランス革命と日本の近代化」と題した研究成果の出版を予定し、来年度以降、ベルンシュタイン文庫の未公開重要史料を逐次刊行していきます。この研究を通して、任期制助手も活発に博士論文を提出するようになり、波及効果は高く、60歳代の院生2人が博士論文を提出しました。これからはシニアも研究の主役なのです」